

つなぐ・むすぶ

「3・11」の現場から

川上直哉

日本基督教団石巻栄光教会牧師

「つなぐ」という言葉があります。

「むすぶ」という言葉もあります。

この言葉は、似ています。でも、少し違う。

この言葉にこだわって、仲間がひとつ、「3・11」の被災地に新しいことを始めていました。まず、そのことをご紹介したいと思います。それは「つなぐ」とこと「むすぶ」ことの違いをイメージしてみるためです。

その上で、「つなぐ」ということから連想を拡げて「絆」を考えてみます。「支倉都市同盟」の挑戦と、そこにつながって行く「東北キリシタン」のことを、お話してみたいと思います。

そして次に、「むすぶ」ということから連想を拡げま

す。「むすぶ（産霊・結び）の可能性」を考えてみたいのです。

「つなぐ」と「むすぶ」の二つの連想を繋げるのは、フィリピンあるいは日本の「植民地」の現場です。

そうしたことが、どんな結論に至るのか。書きながら考え、考えながら書いてみたいと思います。いくばくかの思索の道。ご同道いただければ、まことに幸いです。

序 つなぐこと・むすぶこと

序の一

「3・11」の被災地は広大です。原発事故被災地もあ

り、津波の被災地もある。津波被災地の総延長は六百キロメートルをはるかに超えると言われます。二〇二六年五月現在も日本は「原子力緊急事態宣言」下ですが、その原因たる放射能汚染は岩手から長野にまで至る広がりを見せています。

二〇一一年三月十二日の未明、一人のカナダ人神父が、自分の担当する教会を目指して夜通し塩釜の道を行き、路上で落命しました。この神父は「仙台キリスト教連合」の世話人でした。急遽行われた葬儀に参集した他の世話人たちは「何かしなければ」という思いを抱きました。その頃、全国・全世界から、キリスト教系支援団体が仙台に集まっていました。支援物資も、ボランティアも、続々と仙台を目指して出立していました。そうして、「仙台キリスト教連合」は、全ての教派・団体に声をかけ、会議を招集しました。三月十八日の夜のことでした。

ここで「仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク・東北ヘルプ」が生まれました。この団体は、NPO法人化し、今なお、活動を続けています。筆者はその事務局長の任をお預かりし、現在はその代表の任にあります。

それ以来、ずっと、私は、

- ・キリスト教内部の教団・教派をつなぎ
- ・キリスト教と他宗教・無宗教の団体・個人をつなぎ

・被災地と全国・全世界をつなぐ

ということが続いています。そして、それは

・過去と今をつなぐ

ということに、展開しています。

この「つなぐ」ということの意味を、私は、被災地で、深く学びました。それは神道の方から教わった言葉でうまく言い表せると思います。それはつまり「むすび（産霊・結び）」という言葉です。

つながっていないものを、つなぐ。それがうまくいくとき、そこに新しいものが産まれる。その不思議を、神道では「むすび（産霊・結び）」と呼ぶ。そう教わりました。そして、それは真実だと、現場で学びました。その現場の出来事を、一つ、物語りましょう。

序の二

ひとりの女性が、古川にいました。熱心なクリスチャンでした。彼女の息子さんは、女川町で働いていました。津波が女川を襲いました。息子さんは助かりました。被



黄金浜のガーデン

災後の日々が始まりました。日常が戻って来ても、それはもう「被災後の日常」となっていました。

この女性は、息子の応援に女川を訪ね、そして女川を支援するために古川の仲間を励ましました。その内に、「被災後の日常」を支援したいと、石巻に移住してくだ
さいました。

黄金浜という地名が、彼女の目に印象深く映りました。津波によつて荒れ果て、しかしキリスト教団体が多く支援センターを建て、いつしか瓦礫は片付き、道路が整備され、そして空き地が茫漠と広がった。それが「黄金浜」でした。この言葉の輝きと、眼前の光景のギャップ。彼女の中に、強い思いが湧き立ちました。「このギャップの中に、何かがあるのではないか。」

雄勝に、ローズ・ファクトリー・ガーデンがあります。マスコミなどでよく知られた美しい場所です。しかしそこは、津波の破壊の中に生まれた美しい場所、でした。「これを、黄金浜に」と、彼女は幻を抱きました。自由に使ってくれと、ある空き地を借りることができました。彼女は牧師である私に相談しました。私は牧師ですから、黄金浜の支援センターで活動を続ける宣教師に声をかけ、その空き地に行きました。祈りました。そして「雄勝に

行こう」と。

季節は冬でした。ガーデンは、静かでした。そこに、徳水さん夫婦がいました。お二人の緑化事業の物語を聴きました。「きつと、黄金浜に、ガーデンができますよ」と、不思議な確信をもって、徳水利枝さんは私たちに励ましの言葉をくださいました。

そして本当に、不思議な人の繋がりが次々生まれ、翌年、黄金浜にガーデンが出来ました。

ガーデンは「おむすび村」と命名されました。「おにぎり」ではなく「おむすび」であることに、意味があるのだそうです。つまり、「人と人が結び合うと、こんな素敵なガーデンができる。このガーデンが、また、人と人とが結び合う場所となりますように」という祈りが「おむすび村」という名前に込められているのだそうです。

序の三

「3・11」の被災地は、もともと「少子高齢過疎」の現場でした。「金の卵」ともてはやされて、まるで「ハーメルンの笛吹き男」に魅入られ連れ去られるように、若者たちがこの地を去りました。大人たちも、それを「良

し」としました。そして、今、凄まじい迫力を持って、各地にシャッター通りが広がっています。

その「少子高齢過疎」の現場は、今、「過疎・多死」の現場に変わろうとしています。その現場を「復旧」させるだけでは「復興」とは言えない。——この事は、二〇一一年の秋ごろに、もうすでに、あちこちで語られていました。でも、その声の多くは、空しく響いて消えたように思います。そして、追いつめられた結果でしょう。「被災の当事者」ではない人々が、「復興の当事者」となっています。復興計画は東京で作成され、東京の願望を実現しようとする。たとえば福島には「イノベーションコースト構想」や「ToC」と呼ばれるカタカナ語が躍り、「故郷を返せ」と切望する人は遥か遠隔地に移住を余儀なくされ、新住民に、浜通りは委ねられつつあります。

「新しい何か」を、産み出さなければ。しかも、「被災の当事者」によって。

私も、「3・11」の被災地に立ちつくして一五年が経ちました。「つなぐ」仕事を続けてきました。そして、「むすび（産霊・結び）」の不思議を見してきました。以下、そこから先を展望する思索を紡いでみたいと思います。

1 絆Ⅱ生・綱Ⅱいのちづな

「3・11」の中で、「絆(きずな)」という言葉が、盛んに使われました。もともとこの言葉は「生・綱(きづな)」という意味で、家畜をつなぐ綱のことを指す言葉であるようです。それでこの言葉は、少しの息苦しさも、感じさせます。でも、「生存の危機」に瀕すると、この「絆(きずな)」が、文字通り「いのちをつなぐ」大切なものと分かります。

1の1 「ハボンさん」たちの絆から

「支倉都市同盟」へ

「3・11」のとき、スペインのコリア・デル・リオ(スペイン語で「川の上の丘」と呼ばれる小さな町で、人々が集まり、俳句を作りました。集まった場所は佐藤忠良作の「支倉常長像」が建立されている場所であったといえます。そこに集まった人々は「ハボン(スペイン語で「日本人」)という姓を持つ人々と、その親類縁者でした。

「3・11」のあった、ちょうど四〇〇年前の秋、大津

波がやはり、東北の地を襲いました。その復旧・復興の途上であった一六一三年の秋、伊達政宗が建造した「黒舟」(スペイン語名はサン・ファン・パウティスタ号)が石巻を出帆しました。徳川家康との共同プロジェクトとして、職業外交官でもあったルイス・ソテロ修道士を正使とし、後藤寿庵をプロジェクトリーダーとした「慶長遣欧使節」でした。その実質的なリーダーが、支倉常長でした。太平洋を海路横断し、メキシコを陸路横断し、スペイン艦隊に乗って大西洋を渡り、スペインとローマへ至ったこの外交使節の辿った場所には、後に「ハボン」姓の方々が残されました。二十世紀半ばにはメキシコにその存在が知られました。そして二十一世紀初頭、スペインに多くの「ハボンさん」がおられることが、日本でも知られるようになりました。

「ハボンさん」たちが、スペインで、「3・11」を思っって俳句を作った。時間と空間を越えてつながる絆が、そこに立ち現れた。

この出来事を、俳人の黛まどかさんが知り、黛さんは音楽家で実業家の白田正樹さんに伝えました。お二人は「ハボンさん」たちと共に石巻を訪問し、俳句交流会を開催してくださいました。慶長遣欧使節出帆から四〇〇

年を記念する二〇一三年のことでした。以下に、その時に生まれた句を、四首、ご紹介します（提供くださったハボン・ハセクラ後援会に感謝します）。

Rompe la tierra

La vida de las gentes

Japon de quiebra

地は裂けて

日本のいのち

瀕死なり

Fernando Platero Ferrando

Ishinomaki

te quiero de verdad

El sol resplandecera

石巻

貴方を本当に愛している

太陽も輝き照らすでしょう

Ara Garcia Macias

Pensando en ti

Corazones en calma

Ishinomaki

いつも思っているよ

穏やかな気持ちで

石巻

Maria Jose Japon Munoz

Nombre del barco

San Juan Bautista

Coria te recuerda

その船の名前は

サン・ファン・パウティスタ号

コリアはその名を忘れない

Gabriel Japon Gonzalez

まさにこの俳句交流会のように、慶長遣欧使節を縁として、民間から・文化とスポーツで、国際交流を展開し

よう——その呼びかけは、スペインのコリア・デル・リオ市長から始まり、白田さんに担われて、イタリアと日本にある慶長遣欧使節ゆかりの諸都市へと伝わって行きました。「支倉都市同盟」への道は、そのようにして始まったのでした。

二〇二六年六月、仙台と石巻で、支倉都市同盟は「キックオフ・イベント」を開催しました。四百名程の参加者を得ました。更に今後は八月に「第一回 支倉チルドレン合唱祭」が、十月に「第一回 支倉国際合唱祭」が、それぞれ仙台で、「支倉都市同盟」のキックオフ記念として、開催されることになっています。



支倉都市同盟の活動の一環として、仙台市で「第一回 支倉チルドレン合唱祭」が開催されました。多くの子どもたちが参加し、元気な歌声を響かせました。

「支倉都市同盟」が年内にも成立します！

支倉都市同盟の活動の一環として、仙台市で「第一回 支倉チルドレン合唱祭」が開催されました。多くの子どもたちが参加し、元気な歌声を響かせました。



支倉都市同盟の活動の一環として、仙台市で「第一回 支倉チルドレン合唱祭」が開催されました。多くの子どもたちが参加し、元気な歌声を響かせました。

支倉都市同盟の活動の一環として、仙台市で「第一回 支倉チルドレン合唱祭」が開催されました。多くの子どもたちが参加し、元気な歌声を響かせました。

支倉都市同盟はじまります

1の2 ソテロとフィリピン

慶長遣欧使節ゆかりの重要な諸都市は、メキシコとキューバとフィリピンにもあります。二〇二六年六月の「キックオフ・イベント」には、キューバ音楽を用いて支倉常長を顕彰する「支倉常長友好の絆実行委員会」の方々がステージを飾ってくださいました。そして私は今、フィリピンのことを考えています。

慶長遣欧使節の史実は、「戊辰戦争」後の宮城県民に、大きな力を与えました。まだ「宮城県」が出来上がる前の一八七三年、岩倉使節団はイタリアで慶長遣欧使節団のあったことを知り、驚愕します。自分たちが徹底的に叩きのめした仙台領の民が、自分たちよりも二五〇年前に、自分たちと同じく遣欧使節として海を渡り、帰ったということ。それを知らされた旧仙台領の人々は、どれほど喜んだことでしょう。それは、植民地化された悲しみの中に差し込んだ涼風の如くであつたらう、と、想像します。

同様に一九三〇年代、慶長遣欧使節の史実は、また別の形で、宮城県民を鼓舞しました。「南方雄飛」というスローガンの下、東南アジアへの植民地主義的進出を推進するために、それは用いられました。そして実際に

フィリピンを占領するに至った時、やはり「支倉常長」が想起されました。その時支倉常長は、植民地主義の疚しさをごまかすアイコンとなった、と言ってよいでしょう。

「支倉都市同盟」を考える際、上記の出来事は一つの影を落とします。フィリピンにおいて、「支倉常長」の顕彰は難しい。そこで私は、「福者ルイス・ソテロ神父の名誉回復を」こそ、検討しなければならないと考えています。

仙台市にある臨済宗松蔭山光明寺に、ルイス・ソテロの碑があります。光明寺住職は、かねてより「ソテロの名誉回復を」と訴えていました。慶長遣欧使節は、政治使節としては「失敗」したと言えるでしょう。そしてその責は、もっぱらソテロに充てる言説が、特に宮城県では、多く聞かれます。確かに「伊達治家記録」によると、慶長遣欧使節の「正使」はソテロであったとあります。中世を通じて、神父・修道士の多くが、「職業外交官」を担って生活費を得て来しました。その伝統を徴するなら、使節の責任者はソテロであり、失敗の責もまたソテロが負うべきなのかもしれません。

大妻女子大学の渡邊顕彦教授を中心に、二〇二五年・



ソテロがいた半地下の洞窟

二〇二六年と二度、フィリピンへの研究旅行が催行されました。私もそこに加えていただきました。マニラに「ソテロが修行し祈った半地下の洞窟」を訪ねるなど、その旅は豊かな学びの時となりました。その旅行中、参加者に「使節失敗の責任はソテロにあり」という意見が宮城県では大勢を占めていることを伝えました。すると、それを聞いた研究者は驚き、あるいは色をなして怒り始めました。「ソテロなしには、使節のプロジェクトそのものが、なかったはずだ」という意見でした。宮城県以外では、案外、ソテロの人気は低くない。そう思われ

ました。

ソテロは「福者」です。それはローマ・カトリック教会内では「聖人」と等しい尊敬を集めます。フィリピンはその国民の九割以上がローマ・カトリックの国です。私たちの間で「福者ルイス・ソテロの名誉回復」がなされるなら、それを足掛かりに、マニラを「支倉都市同盟」にお迎えし、繋がりを拡げることができるのでは——と、その様な夢を抱いています。



キリシタン厨子

1の3 フィリピンと東北キリシタン

フィリピンで学んだことは、非常に多くありました。特に華僑文化の中におけるキリスト教と他宗教との混淆の様子は、非常に印象的でした。

たとえば、マニラ郊外にある巨大な華人墓苑を訪ねた時のことです。その中のある廟には、黄金の仏像が中心に据えられ、その周囲にキリスト教の聖人像が配され、仏像の斜め後ろにキリスト磔刑像が置かれていました。

あるいは、華人街の路地には、大きな十字架があり、その前に儒教式（日本であれば仏教式）の御線香があげられていました。そして、その十字架に向かって「箕杯（ジャオペイあるいはポエ）」と呼ばれる華人独特の信仰に基づく祈り・占いを熱心に行っている若い女性がおられました。

日本のキリシタンのことを思い出します。たとえば、雄勝には「子育て地蔵」があります。あるいは、岩手県一関市藤沢町大籠の「キリシタン殉教資料館」には、厨子の中に金色の十字架を記し、それを仏像で隠すしかけになっている「キリシタン厨子」が、地域の古民家から発見され、展示されています。「キリスト教」なのか「仏教」なのか「華人の宗教」なのか、客観的には判然とし

ない。判然とさせる必要がない。判然としないから、個々人の宗教性が自由に展開できる。そんなことがあるようです。諸宗教の共存・協働ということに、宗教そのものの未来があると思います。それはつまり「複数の世界観をつなぐ」という可能性です。そしてそれは、決して「日本だから」とか「日本人ならでは」という事ではない。フィリピンで学んだことは、私たちの間にある「つなぐ」可能性の広がりだったと思います。

2 むすび（産霊・結び）の可能性

以上、「つなぐ」ということを考えました。以下、「むすぶ」ということを考えます。

2の1 フィリピンの火事と大航海時代

フィリピンのマニラで、私は、素晴らしいホテルに宿泊しました。カードキーで部屋に入り、シャワーがあり、屋上にはペントハウスがある。場所はイントラムロス（旧市街）の中にあり、ソテロや支倉常長がいた時のままだに、城壁が残されている。その旧市街を眼下に眺めながら、ビールを頂き、フィリピン料理を頂く。

ふと、眼下に火の手を見ました。火事でした。いつまでも、火は燃え続けていました。それを上から眺めている私の背後では、急に大きな声。「Happy birthday」の掛け声と、祝福の歌声。

翌朝ガイドの方が、顔色を変えて教えて下さいました。「昨日、火事でした。ホテルからそう遠くないところ。そこはスラムになっています。刑務所から出所して帰って来た男性が、自宅に別の男が住み着いているのを見て逆上し、油をまいて火をつけた。煙はスラムの中になく、逃げられなかった子どもたちが、たくさん、亡くなったのです。」——それは、屋上のペントハウスからは決して見えなかった地獄でした。

フィリピンの特徴は、貧富の差が露骨に見えるところにあります。そのギャップを、私はその日、体験した格好になりました。その露骨な貧富の格差は、結局、大航海時代から続く「植民地主義」の結果であるようです。

フィリピンと日本は「グローバリゼーション」成立の最後のピースであった、と聞いたことがあります。スペインがポルトガルを事実上併合し、一つの権力体が地球を「球面」として支配するに至った。その最後をつないだのがフィリピンでした。それまでは「境界線をもった

平面」として、地球は支配されてきました。アレクサンダー大王も始皇帝もチンギス・ハーンも、その支配は「グローバル」なものではなかったのです。フィリピンにおいて、地球を「球面」として支配する、という体制が生まれました。そして、その体制と互角に向き合ったのが、一六〇〇年代の日本であり、慶長遣欧使節でした。地政学と歴史の織り成す綾として、フィリピンと日本は対照的な歩みを示します。フィリピンは「初のグローバルゼーション」の中での植民地となった。対照的に、日本は「鎖国」と長く呼び慣らされた管理貿易体制の中でスペインを排除しました。それが、大航海時代の帰結でした。そして今、フィリピンの極端な貧富の格差があり、日本の比較的均一な社会がある。

2の2 植民地・東北と「キリシタンツアー」

しかし植民地化を免れた日本の中で、例えば東北は、長く植民地としての苦勞を担わされました。アテルイの「三十八年戦争」、前九年・後三年合戦の結果生まれた藤原政庁を破壊した「奥州合戦」、伊達政宗と蒲生氏郷が豊臣政権の下に行った「奥州仕置」、そして「戊辰戦争」。繰り返し敗北し、植民地化され続けた歴史の中に、

東北はありました。そしてたとえば「百万遍」と呼ばれるお念仏の儀式が曹洞宗の檀家内の葬儀で継続し、あるいは室町時代までのご本尊が秘仏として隠されつつ拝まれ、また石巻市雄勝の「子育て観音」や一関市藤沢の「キリシタン厨子」のような混淆した宗教が育まれた。それが東北です。

諸宗教の共存・協働は、被植民地であるフィリピンと東北に顕著にみられる。「植民地」が、その共通項ではないか。

キリスト教思想を研究する学問を「神学」といいます。現代神学の中でよく語られたことは「遍在する神の偏在」ということです。つまり「神様は、小さくされた方・弱くされた側に、いつも偏って味方される」という思想です。それは旧約聖書を源泉とし、二十世紀後半の「脱植民地」運動を支える草の根の力となりました。

二十一世紀の今、この「遍在する神の偏在」は、諸宗教の共存・協働を、あらゆる場所で成立させる鍵となりそうです。

二十世紀の終盤、盛んに「脱植民地主義」とか「ポスト・コロニアリズム」あるいは略して「ポストコロ」と呼ばれる議論に、私も大学院で、勤しみました。神学を専

門にした私は、東北に来て、キリシタンを掘り起こし、そしてようやく長い学生時代を通じて学んでいたことを、自らの血肉にすることができてきたように思います。

このことを、私はいつも、「東北キリシタンツアー」で確認しています。

十年ほど前から、私は仙台白百合女子大学カトリック研究所の客員所員として、「東北キリシタン」研究を担当しています。その成果を活かし、NPO法人「東北ヘルプ」の事業として、旅行社と連携し、東北キリシタンツアーの解説員をしています。毎年百名程度の方々を東北のキリシタン史跡にお連れしています。韓国のカトリック教会巡礼団の方が、その大半となります。

韓国の方々は、仙台空港から三陸道を北上してキリシタン史跡へバスで向かわれます。私は解説員として、津波の被害を説明しつつ、旅を始めます。ほどなく右手に「多賀城南門」の復元されたものが見えてきます。そしてすぐ、左手にグランディ21が見えてくる。「この二つは、近現代の日本列島と朝鮮半島における植民地主義を考える、大切な場所です」と、私は解説をします。

戊辰戦争を終えた後、仙台領は解体されました。たとえば石巻・牡鹿・桃生は「高崎藩」の領地とされます。

江戸時代を否定するために明治政府は「鎌倉時代以前」の日本を、つまり「太政官制度」を、復活させようとしています。かつて太政官制度と共に成立・展開したのが「多賀城」でした。それは東北を植民地化するための拠点でした。それとまったく同様に、仙台城には帝国陸軍第二師団を置き、また仙台の片平に帝国第二大学を設置する。それが明治政府の政策となります。そうして仙台で植民地経営の試行錯誤を行い、その延長線上に琉球・朝鮮・台湾・満州の経営を展開する。それが日本の近代史となる。その原点を示すものが「多賀城南門」です。

そしてその植民地主義への強烈な反発が、安重根による伊藤博文射殺事件でした。逮捕され死刑執行までの拘留下にあった安重根を世話したのが、宮城県出身の千葉十七。その二人の友情の証として残されたのが、安重根の遺書「為国献身軍人本分」。その揮毫を巨大な石碑として記念碑を建立したのが、栗原市にある曹洞宗森城山大林寺。「その石碑を詣でたい」と、二〇〇二年日韓ワールドカップサッカー大会の時、多くの韓国のサッカーファンが熱望し、その要望に応えるべく宮城県内に建設されたのがグランディ21である——という経緯を、私は説明します。「朝鮮総督府のモデルとなった多賀城南門と、

朝鮮半島の植民地化への抵抗のシンボルとなった安重根を覚えて建てられたグランディ21と。二つの間を走るこの高速道路は、植民地化という東北の歴史への入り口として、とても意味があります」と、私は解説し、その先に、諸宗教共存・協働の実践となった東北キリシタンの史跡を紹介しています。

2の3 過去と今を「むすぶ」こと

東北キリシタンツアーの中で、

「キリシタンの世紀全体の、最後の華としての慶長遣欧使節」

「キリシタンの生業としての土木と製鉄」

「島原の乱と諸宗教衝突の結果としての大殉教」

「キリシタンを隠した仙台政庁と寺社勢力」

を、現場でお話します。そして、その背景として

「百済救援に失敗し、半島の権益を失い、

難民を大量に受け入れた結果の、大和朝廷の東征」

「エミシは人であったことにショックを受けて

付けられた「人首」^{ひとかぶ}の地名」

「南北朝の混乱期になってようやく、

エミシも日本人となったこと。その時間の長さ。」

という古代から中世の話をします。そして

「3・11の被災地において、巨大防潮堤・コンパクトシティが建設され続け、また、米国ハンフォードをモデルにした福島復興が推進されている。これは全く、古代の植民地の姿と重なって見える。」

という現代の話をします。そして、その中で「東北キリシタン」を語る。それはつまり

「過去と現在をつないで未来を拓く」

ということ、つまり「むすび（産霊・結び）」の不思議をご一緒に予感する旅を、エスコートしているのだと思います。

結 「今だけ・カネだけ・自分だけ」

を解除する鍵

「東北キリシタン」の研究を通して、そして、被災地の支援事業を通じて、私は今、現代東北への「植民地主義」の実際を見つめていると思います。学生時代、「植民地主義者」の悪を指弾することに夢中になっていた自分がいました。でも、今、それは短慮であったと、よくわかります。東北に「植民地主義的」な復興をもた

らす人々とも、出会う機会を得たのです。私は自分の過去を恥じます。どこにも、悪人はいなかった（あるいはちよつと、いたかもしれません）。ただ、皆さん、「今だけ・カネだけ・自分だけ」という批判を甘んじて受けておられる。「今」を乗り切らなければならぬからです。それは、切ない現実です。

逆に言えば、しかし、どうでしょう。もし「今」の中に閉じ込められた状態を脱することができたら……。私たちの足元には、「今」と同じ苦勞を担い、あるいはそれに挑戦した「過去」があります。それを、今につなげる。そうすれば、少なくとも気持ちだけは・思いだけは・志だけは、「今」から解放される。——そんな「むすび（産霊・結び）の可能性」を私たちは望み見られる、かもしれない。

未来を拓く一歩は、そうして、得られるのではない。か。そう思います。たとえば「支倉都市同盟」は、その兆しなのではないか。これを暫定的な結論として、「つなぐ・むすぶ」ということを考えるこの思索の歩みを、ひとまず、終えたいと思います。

石巻学プラスワン 2026 4/13 (日) Vol.27

過去と未来のつながり
——マニラで思ったこと

石巻栄光教会・川上直哉氏の報告

開場 午後6時
開演 午後6時半
会場 ラ・ストラーダ（石巻市立町 2-5-2 2F）
入場料 1500 円（ドリンク販売あり）
案内人 大島祥雄（石巻学プロジェクト代表）
出演 川上直哉（石巻栄光教会牧師・仙台白百合女子大学カトリック研究所員）

10号というひとつの節目を迎えた「石巻学」は、11号からあらたに「結ぶ」というテーマを掲げ、石巻の魅力を再発見するだけでなく、石巻とつながりあうことを目指してまいります。

今年のはじめ、牧師という立場を超えて、福祉や教育のほか、さまざまな分野の社会活動に関与している石巻栄光教会の川上直哉さんをお迎えします。川上さんは近年、「支倉都市同盟」結成に携わった活動に関わっており、これは東洋経済新報社とゆかりの深いつながりという点から「結ぶ」活動です。今年の2月に石巻市長選運動の支援と実行にも深く関与したリフ・ソテロの名譽牧師、のために、フィリピン、マニラを訪ねました。作家としての活動も振り返るとともに、マニラで出合った出来事や関わりながら、過去と未来をつなぐことの意義を語ります。そこで見てきた、感じたことを中心に、「支倉都市同盟」と「私たちの道徳的レール」について、語ります。



川上直哉氏



案内人 大島祥雄

2026年4月13日に開催された石巻学プラスワン vol.27（於ラ・ストラーダ）での川上直哉氏による「過去と未来のつながり——マニラで思ったこと」チラシ

予約・問い合わせ ラ・ストラーダ
☎0226-94-9002 | info@la-strada.jp



石巻市立町 2-5-2 2F
ラ・ストラーダ

編集後記

大島幹雄

昨年一〇号という区切りの号を出すことができた、また新たな気持ちで制作にあたった。いままでのようにワンテーマではなく、特集も組みながら、いろいろな記事をいれていき、雑誌本来の楽しさを味わってもらえる一冊になったのではないと思う。その中で意識したのが、「結ぶ」。そして「つなぐ」ということだった。地域と地域を結ぶ、過去と未来をつなぐ、石巻にこだわりのながら、石巻だけに埋没するのではなく、広がりをもちたいという思いがこめられている。

石巻学は、つねに広場のように、開かれ、さまざまな人たちが交わり合う場でありたいと思っている。

今回特集にとりあげたのは楽隊。いままでだったら、もう存在しないものを掘り起こすだけで終わったが、今回楽しかったのは、石巻学プラスワンという場で、それを復活させようという動きが生まれたこと。こうしたことが続くと面白い展開が生まれていくような気がする。石巻学をひとつの場として、なにかを生み出す場にしていきたい、そんなことを思い起こさせた一〇号であった。

石巻学プロジェクトについて

「石巻学プロジェクトは地域誌『石巻学』刊行をその活動の柱に据えて協力していく団体です。

『石巻学』を一緒につくりながら石巻地域の魅力をより広く、より多くの皆さんに伝えるとともに、本誌を拠点として石巻の歴史や文化を掘り起こし、未来に向けての発展の道を模索し続けます。各メンバーはこの趣旨に賛同し、本誌特集をはじめとするさまざまなアイデアを出してプロジェクトを推進していきます。メンバーは以下の通りです（五〇音順）。

大島幹雄／古閑良行／須能邦雄／高成田享／武内宏之／本庄雅之／本間英一／八島慎治／吉田昌子

石巻学 vol. 11

2026年9月30日 第1刷発行

発行◎石巻学プロジェクト（代表・大島幹雄）
〒236-0052 神奈川県横浜市金沢区富岡西 2-21-23
電話 090-2207-8185 ファクス 045-773-4643

E-mail : izj00257@nifty.com
郵便振替口座 00250-0-88624

発売◎株式会社アトリエ花粉館
〒722-0062 広島県尾道市向東町 37-2
電話 0848-44-2436 ファクス 0848-29-4452
E-mail : info@kafunkan.com

© ISHINOMAKIGAKU Project
2026 Printed in Japan. ISBN978-4-911530-11-5
落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

石巻学

歩く 見る 聞く 石巻

渡邊俊夫
奥中康人
大熊ワタル
相澤政洋
本間英一
阿部和枝

志賀理江子

特集

ジンタ楽隊がやって来た！

vol. 11

成田暢
阿部和夫
川上直哉
黒田大介
大島憲治
伊藤克行
須能邦雄

